

面金は武道具製造業者が自社でつくっている部分で、すべての業者が専門の金属加工業者に依頼している。そして現在日本で面金を製造しているのは三社だけだ。今回は川辺さんの案内で、その一つである真和工業株式会社を訪ねた。隣の燕市とともに金属加工の町として知られる新潟県三条市にあり、初めてチタンの面金を作った会社である。

現在、商品として売られている面金の材質はジュラルミンが主で、他にチタンがある。

「ジュラルミンがおそらく9割、チタンは1割ぐらいでしよう。チタンは壊れないから買いたい替え需要が起きないこともあります。

感覚としては、スプーンを折るよう金属の板を何度も折り返すと、ジュラルミンが3回か4回で二つに割れるのに対しチタンは10回やつても割れないときがある、というぐらい強度が違います。剣道の面金はそれだけではなくいろいろな要素があつて、竹刀で叩かれたり、ぶつかった振動もありますが、それらを総合しても壊れにくいのはチタンになるでしょうね」

と親和工業代表取締役の長谷川暢彦さんは話す。チタンは元素の一つ、つまりチタンといふ金属である。一方のジュラルミンとはアルミニウムと銅、マグネシウムなどによる合金だが、その配合や処理によって多くの種類がある。長谷川さんの父である治司さんが、何十種類ものジュラルミンの丸棒を取り寄せ、曲げたり折ったりのテストをして選んだものが現在使っている材料だという。

面金の製造工程については次回以降に譲り、今回は創業者である治司さんの話を中心に、

# 日本でつくる剣道具

——剣道具の製造工程、すべて見せます

## 第8回 面金製造業者は三社だけしかない

面金の進化の歴史をざつとたどってみることにする。

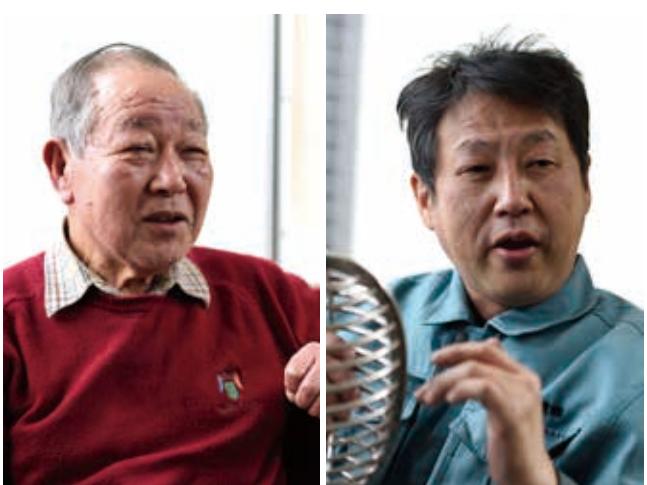
### 航空機のみに使われていたチタンを初めて採用

昭和13年に三条市で生まれ今年79歳になる治司さんは、剣道経験者だ。終戦時は小学1年生で、中学に入つて1~2年が経つてから剣道が復活してできるようになり、三条武徳殿で剣道を始めた。進学した商業高校にはまだ剣道部がなく、校長に直談判して同好会を立ち上げたそうだ。

真和工業代表取締役の長谷川暢彦さん(右)と、創業者である父・治司さん

「その人は剣道を知らないからこんな面をつようという話を持ちかけた。しかしその面金は角が出っ張っていて一発で面紐が切れてしまうようなものだった。剣道を知っている治司さんは見た瞬間にそれが分かった。

ようという話を持ちかけた。しかしその面金は角が出っ張っていて一発で面紐が切れてしまうようなものだった。剣道を知っている治



撮影=窪田正仁

案内人  
(株)全日本武道具、  
日本剣道具製作所代表取締役  
**川辺尚彦**



くったのだろうと思いました。私ならこうする、ああするというのが見た瞬間分かったので、悪いけれどもあなたの手伝いはできませんと断り、自分でつくつてみました。最初は鉄でつくりましたが、本気でやるならチタンだなと思ったんです。燕ではステンレスの加工が主だったのですが、ステンレスではなくチタンだといました」(治司さん)

それはなぜか。昭和44年(1969)にアメリカが初めて月に有人宇宙船を着陸させたが、それを特集したテレビ番組を見ていると、宇宙船にチタン、マグネシウム合金、セラミックが使われていることを盛んに言っていたからだ。しかし、当時三条ではどこで聞いてもチタンが入手できなかつた。それもそのはずで、当時チタンはまだ航空機などにしか使われていなかつたのである。そこで東京に何度も出張して、ようやくチタンの材料を供給してくれる大同特殊鋼という会社を見つけた。

「最初に10個分の材料を分けてもらつて、8

卒業後は東京、そして新潟の企業で経理の仕事をしていたが、結婚し長男暢彦さんが生まれて間もなく、三条市に帰ってきて独立する。夫人の実家の家業が金属加工で、親戚に馬の縄を作っている会社があり、その仕事をさせてもらつたが、事業を拡大するため三条市の中心部からややはづれた現在地に土地を買って移つた。

轡のほかに眼鏡のフレームをつくり始めたが、そんな時に知り合いが、治司さんが剣道経験者であることを聞き、つくった面金を持て訪ねてきて、一緒に面金づくりの仕事をし

個手づくりで面金をつくりました。そしてその会社に持つていったら、これはうちで供給した材料と違うというんです。それは私が鏡面研磨をしたからです。チタンを磨くとそんなに光るなんて、その人たちも知らなかつた。

世界で初めて私がやつたんです」（治司さん）この鏡面研磨は燕や三条の独特の技術であるという。工場で鏡面研磨の作業とその前後面金を見せてもらつたが、確かに驚くほど光沢が違う。

真和工業の工場には高いところに多数の面金が並んで吊るされていた。よく見ると面金少しづつ移動している。その仕組みについては次号以降で紹介する



手前が鏡面研磨を施した面金で、奥が元の状態（写真はジュラルミン製面金）。同じ材質とは思えないほど光沢が出ている

## 新しい材質を工夫し見えない面で進化してきたが

面金の歴史をたどってみると、最初は鉄でつくられており、下部が鋸びやすいので下の3本の横ひごを真鑑にしたものが生まれ（すべて真鑑のものもあった）、その後洋銀が一般的となつた。そして現在のジュラルミン、チタンの時代となるが、その前にステンレスの面金なども生まれている。

大雑把に重量を比較すると、成人用のもので鉄が600g弱、洋銀はそれより重く600g強であるのに対し、チタンが350g前後、ジュラルミンが300g弱と大きな違いがある。ジュラルミンは鉄のほぼ半分だ。

現在は、横ひごの上の二本だけチタンであるはジュラルミンやチタンの面金が普及していく

治司さんは、つくれた面金を持って剣道具関係の業者を回った。熊本の業者が最初にい返事をくれたのを皮切りに、徐々に広がっていく。今でもチタンは高級品だが、当時は航空機以外に使われていなかつたものだけに高価で、面金だけの卸価格で面一つ買えるほどの値段だつた。しかし高くてもいくつもの剣道具業者が採用してくれた。

そして、それからさほど間をおかず、前述のように軽くて強度のある素材を探しジュラルミンの面金の供給も始めた。それまで一般的だったのは洋銀（洋白とも呼ばれる銅と亜鉛、ニッケルの合金）の面金である。

「父が金型で大量生産するようになり、そういう技術に追いつかないところがやめていったわけです。現在うちでは機械による大量生産の部分と手づくりが半々といったところでしようか。一番多いときには年間15万個うちだけでつくっていたらしいですが、現在は当時の5分の1ほどで、父や母、妻も含め社員5人と忙しいときにパートに1人来てもらつてまかなえる量です」（長谷川暢彦さん）

現在、真和工業では面金のみならず、剣道具の打ち込み台や空手の防具、まったく畠違いの給食用品なども製造している。面金は三社合わせても15万よりはるかに少ない数だとう。そして、海外でも面金づくりに取り組んだところはあつたが、技術の壁をクリアできず現在はすべてが日本製だそうだ。

材料の変化を見ても、後述するようにその他の点でも面金は進化し続けてきたといえる。しかし長谷川さんにとっては、空手の防具や給食用品などが常に材料を探し実験をして、新たな要望に応えるものをつくるなければならないのに比べれば、剣道の面金は進化がないそうだ。工夫を加えても見かけが大きく変わると認められないのもいう。

繰り返しになるが、貴重な面金製造の技術を持つているのは日本に三社だけしかない。「三社だけで剣道文化を支えているんですよ」と川辺さんは言う。